

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第 50 回
カタバミの仲間

もとよし ふさお
本吉 総男

2019 年 6 月

カタバミは道ばた、畑、庭などにごく普通に見られる在来種です。カタバミは、小さいのであまり目立つ植物ではありませんが、畑の主な雑草のひとつです。カタバミの仲間の在来種はカタバミの他、オオヤマカタバミやミヤマカタバミなど数種ありますが、みずき野周辺で見られるのは、カタバミとカタバミの品種（下の囲み記事参照）のアカカタバミやウスアカカタバミだけです。しかし、カタバミの仲間には、外来種が帰化植物として数種が自生しています。

カタバミの仲間の葉は、シロツメクサ（クローバー）やアカツメクサと同じように3枚の小葉しょうようからなっています。でも、シロツメクサやアカツメクサはマメ科で、カタバミの仲間はカタバミ科ですから、類縁関係はなく、花の形はまったく異なっています。

カタバミは葉や茎を噛むと酸っぱい味がします。これは葉や茎に含まれるシュウ酸水素ナトリウムのせいと考えられます。カタバミは漢字の「酢漿草」と当て字されています。酢漿草は酸っぱい草という意味です。このことからスイモノグサとも呼ばれていました。カタバミの仲間の属名を学名で Oxalis（オキザリス）といいますが、やはり酸っぱいことを意味します。

カタバミは「傍食」と書くこともあります。また、カタバミの葉は家紋にもデザインされていますが、家紋のカタバミは「片食」という漢字が使われています。傍食または片食は、葉の形に由来する名ですが、なぜそう呼ぶのか確定した説はありません。私は、小葉の上辺にくぼみがあるからではないかと思っています。



「品種」について

日本語では「品種」という言葉に2つの意味があります。ひとつは分類学上の品種(forma)で、もうひとつは園芸植物や作物から人為的に改良された栽培品種(cultivar)ですが、通常は略して品種と呼んでいます。「品種改良」や「新品種」などはよく使われる言葉です。

分類学上の品種と栽培品種の例

分類学上の品種(forma)

- ・カタバミの品種: アカカタバミ、ウスアカカタバミ
- ・ツユクサの品種: シロバナツユクサ
- ・ムラサキサギゴケの品種: サギゴケ(白い花が咲く)
- ・タチツボスミレの品種: オトメスミレ、シロバナタチツボスミレ、アカフチタチツボスミレなど
- ・イタドリの品種: メイゲツソウ(紅色の花が咲く)

栽培品種(cultivar)

- ・イネの栽培品種: ささにしき、こしひかりなど
- ・バラの栽培品種: クイーン・エリザベス、プリンセス・ミチコ、カクテルなど
- ・ナシの栽培品種: 二十世紀、豊水など
- ・オランダイチゴの栽培品種: とちおとめ、あまおうなど
- ・ジャガイモの栽培品種: 男爵、きたあかりなど

1 カタバミ、アカカタバミ、ウスアカカタバミ

これら3つは同種ですが、主として葉の色の違いによって、品種（前述したように同じ種に属するが、少し違っているときに使う分類基準）として区別されています。これらはごく普通の在来種ですが、世界中に広く分布しています。

カタバミは葉が緑で、花は黄色。中心部は薄い緑色です。アカカタバミの典型的な葉の色は赤褐色です。また、花の中心にははっきりした橙色の斑紋はんもんが見られます。ウスアカカタバミの葉の赤褐色はアカカタバミより薄く、葉によって色が異なります。花の中心にはやはり橙色の斑紋はんもんがありますが、アカカタバミより薄くなっています。ウスアカカタバミと思われるものの葉にも赤褐色がかなり濃いものがあり、アカカタバミとウスアカカタバミとの境界は判然としません。右にアカカタバミとして載せたものは葉ごとに色の違いがありますが、かなり多くの葉は濃い赤褐色で、花の中心の橙色の斑紋はんもんがはっきりしているので、アカカタバミと判断しました。

これらはいずれも春から秋のはじめ頃まで咲き続けます。

カタバミの仲間は花が咲いた後、ロケットのような形の実をつけます。身が成熟すると、実の割目から種子が勢いよく飛散します。残念ながら、その様子を示す写真がありませんが、YouTube にその様子がよくわかる動画（[「はじける種 カタバミ」](#) 2分34秒）がありましたので参照してください。



カタバミ 5月上旬 7丁目道ばた



アカカタバミ 5月下旬 5丁目道ばた



ウスアカカタバミ 6月中旬 7丁目道ばた

2 オッタチカタバミ

オッタチカタバミは北アメリカ原産の多年草で、葉も花も緑色のカタバミとよく似ていますが、カタバミの茎の高さはせいぜい 10 センチほど、オッタチカタバミの茎は高さ 10~50 センチほどになるので、判別は簡単です。花は春から秋のはじめ頃まで咲きます。

外来のカタバミの多くは、栽培種として入ってきたものが野生化して帰化植物になったものが多いのですが、オッタチカタバミは野草で、戦後、アメリカ軍の荷物について侵入してきたものと考えられているようです（『日本帰化植物写真図鑑』 全国農村教育協会）。



オッタチカタバミ 5月中旬
第1調整池花壇
(栽培されているのではなく、
自生しているものと思われる)

オッタチカタバミは、みずき野では 2009 年以前にはほとんど見られなかったように思います。私が初めて、珍しい植物と思って写真にとったのが 2010 年の夏でした。その後、オッタチカタバミは急速に増え、今ではカタバミよりはるかに多く見られるようになりました。道ばたに見かける小さな黄色い花をつけているカタバミの仲間は、ほとんどがオッタチカタバミです。在来種のカタバミは、オッタチカタバミが増え始めてから、次第に少なくなったように感じています。

3 ムラサキカタバミとイモカタバミ

ムラサキカタバミは南アメリカ原産の多年草で、江戸末期に渡来し、園芸植物として鑑賞された植物ですが、その後野生化し、繁殖力が旺盛で畑の雑草として嫌われるようになりました。花は春から秋のはじめ頃まで咲きます。

イモカタバミはムラサキカタバミによく似た南アメリカ原産の多年草で、戦後に栽培種として渡来したと考えられています。現在、道ばたには、ムラサキカタバミよりイモカタバミを多く見かけます。イモカタバミは春から秋まで花をつけます。

ムラサキカタバミとイモカタバミは、花を見れば識別できます。ムラサキカタバミの花の中心は淡緑色ないし緑色ですが、イモカタバミの花の中心は濃い赤紫色です。

イモカタバミの白花の園芸品種にシロバナイモカタバミがあります。それらしい植物が第2調整池花壇で花を咲かせていました。イモカタバミと同様、たくさんの純白の花をつけ、清楚な感じの植物です。

ムラサキカタバミとイモカタバミのもうひとつの大きな違いは、繁殖の仕方です。ムラサキカタバミは鱗茎^{りんけい}から発芽します。鱗茎^{りんけい}とは園芸ではよく球根と呼びますが、根ではありません。広辞苑には簡潔に次のように説明しています。

~~~~~  
 鱗茎<sup>りんけい</sup>：地下茎の一種。著しく短縮した茎の周辺に多量の養分を貯えて厚くなった葉が多数重なって、球形・楕円形または卵形をしたもの。ユリ根・タマネギの類。(広辞苑)  
 ~~~~~

~~~~~  
 鱗茎<sup>りんけい</sup>というと、ユリ根やタマネギのように大きなものを想像しますが、ムラサキカタバミの鱗茎<sup>りんけい</sup>はごく小さいもので、長さ6~7ミリの楕円形です。このような鱗茎<sup>りんけい</sup>が多数集まって、鱗茎<sup>りんけい</sup>のひとつずつから1本の茎が生じます。鱗茎は、人によって運ばれたり、耕作の際にバラバラになって広がるのではないかと考えられます。本当かどうかわかりませんが、ムラサキカタバミは日本では種子ができないというのが一般の説です。



ムラサキカタバミ 5月中旬 第1調整池花壇



イモカタバミ 5月中旬  
7丁目道路沿いの植え込み



シロバナイモカタバミと思われる  
5月中旬 第2調整池花壇

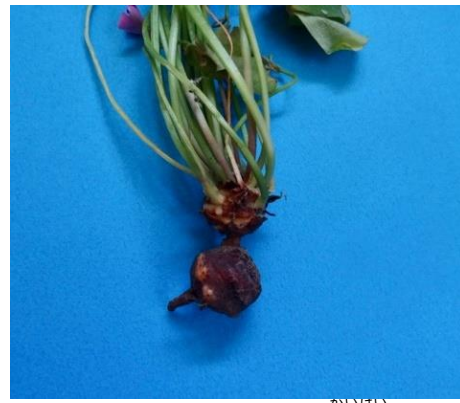
イモカタバミは塊茎<sup>かいけい</sup>から発芽します。広辞苑では塊茎<sup>かいけい</sup>を次のように説明しています。

塊茎<sup>かいけい</sup>：地下茎が甚だしく肥大して塊状をなすもの。多くは澱粉<sup>でんぷん</sup>などの貯蔵物質を貯える。ジャガイモやキクイモの地下茎はこれに当たる。(広辞苑)

つまり塊茎<sup>かいけい</sup>とはイモのこと。イモカタバミの名の由来です。ついでながら、サツマイモは塊茎<sup>かいけい</sup>ではなく、根が肥大したもので塊根<sup>かいこん</sup>といいます。



ムラサキカタバミの鱗茎<sup>りんけい</sup>



イモカタバミの塊茎<sup>かいけい</sup>

#### 4 その他のカタバミの仲間

オオキバナカタバミは南アフリカ原産の多年草で、明治中期に園芸植物として輸入され、現在では道ばたなどに自生しています。大きな黄色い花をつけ、小葉<sup>しょうよう</sup>に小さな褐色の斑点があるので、他のカタバミの仲間とは容易に識別できます。種子によっても繁殖するようですが、主として鱗茎<sup>りんけい</sup>によって増えます。花は春から秋まで咲き続けます。



オオキバナカタバミの花と葉(小さい褐色の斑点がある)

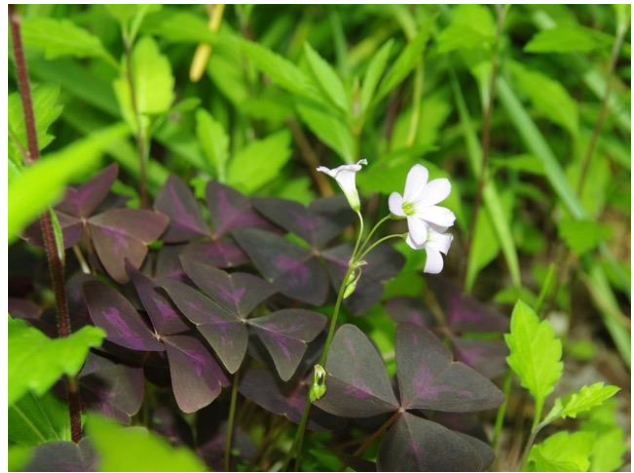
4月上旬 6丁目道路沿いの植え込み

ハナカタバミは南アフリカ原産の多年草で、イモカタバミに似ていますが、花や葉が大きく、華麗です。江戸時代の末に渡来した園芸植物で、地方によっては野生化しているようですが、みずき野周辺では野生化したものは見かけません。花は秋に咲き、主として塊茎かいけいによって増えます。



ハナカタバミ 10月下旬 さくらの杜公園

オキザリス・トリアングラリスは、南アメリカに原産する多年草で、紫の葉、ピンクの花が美しい園芸種です、苗は「紫の舞」という流通名で売られています。みずき野周辺の散歩道で見かけたことはありませんが、家庭の庭にはよく栽培されている植物と思いますので、紹介しておきます。花期は長く、初夏から秋まで咲き続けます。



オキザリス・トリアングラリス(紫の舞)  
5月中旬 わが家の庭

## ● ● ● 余 談 ● ● ●

カタバミの仲間は、江戸後期以前は平地では在来種のカタバミ(アカカタバミ、ウスアカカタバミを含めて)しか見られなかったと思います。繁殖力の強い畑の雑草ですから、農家の人々にとっては防除の対象としてよく知られていたかもしれませんが、一般にはあまり目を引く植物ではありません。しかし、本文を執筆して感じたことは、均整の取れた葉の形の美しさです。いわば自然が作り出した美の傑作と思いました。でも昔からそれに気づいた人がいるようです。それは、カタバミの葉がデザインされて家紋によく使われていることからわかります。特に、戦国大名の長曾我部家、宇喜多家、徳川家の重臣酒井家の家紋には片食かたばみがデザイ

ンされています。インターネット上でこれらの家紋の図が見られるので、興味のある方は検索してみてください。

家紋はの起源は平安時代の中頃、貴族が車や輿につけたこし車紋くるまもんに由来するようです(マイペディア電子辞書版)。この時代は家紋とはいわなかったと思いますが、カタバミが紋として使われるようになったのはいつの時代からでしょうか。

清少納言の枕草子のういんぼん(能因本)の「紋は…」の段には「紋はあふい葵。かたばみ。」とあり、この紋は、綾織物に織り込んである紋柄だそうです(松尾聰・永井和子訳・注『枕草子 [能因本]』笠間書院)。また、「草は…」の段に「酢漿かたばみ、綾あやにてあるも、異ことよりはをかし。」と記しています。すでに平安中期までには、カタバミの葉の形に目をつけて、紋柄に取り入れた人がいたことには驚かされます。

(注:枕草子には4つの伝本(伝本:写本され、現在まで残されている本)、さんかんぼん三巻本、のういんぼん能因本、前田家本、堺本の4つに分類され、内容はそれぞれ少しずつ異なっているようです。前田家本、堺本はまだ読んでありません。さんかんぼん三巻本(岩波文庫など)がもっともよく読まれているようですが、「紋は…」の段は、さんかんぼん三巻本には出ていません。)